慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	S・アアロノヴィチ著 支配階級：イギリス金融資本の研究
Sub Title	The ruling class, by Sam Aaronovitch
Author	飯田, 裕康
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1962
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.55, No.5 (1962. 5) ,p.519(87)- 523(91)
JaLC DOI	10.14991/001.19620501-0087
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19620501-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

にたいする寄生的依存と民族運動の勃興、それから当然結果する技術的後進性――をのりきるべく、打出された産業合理化政策とこれに反対して闘う労働者階級の運動について追求されている。一九二六年のゼネ・ストについての本格的な研究が、イギリスでさかんにおこなわれている折から、この研究は注目に値すると思う。

さて、読み終って感ずることは、著者が長年の研鑽の末まとめあげられた本書は、まことにそれにふさわしい内容の充実さを示し、そしてまた堅実にして真摯な学風をしみじみと感じさせることである。ただ同じ問題にとりくむ者として、卒直に意見をのべさせていただくならば、「はしがき」でのべておられるように、もし著者が社会政策の本質究明を、その危機的形態をあらわにする国家独占資本主義段階との関連で把握することの必要性（三頁）という認識に立っているとすれば、第一次世界大戦後のイギリス独占資本の再編成の過程と、とくにイギス労働党との関係が、いま少し克明に追求されるべきではなかったろうか。なぜなら独占資本主義が国家権力との抱合妥協を完成したのは、第一次世界大戦後の危機をのりこえて装いも新たに再編成された過程ののち、ほかならぬ一九二九年―三一年の恐慌期を通じてであり、この過程とそれ以後、つまり第二次労働党内閣の成立とその崩壊そしてさらに国民内閣への推移のなかで、マクドナルド政権が独占資本の走狗として反労働者的な政策をとらなければならなかったという〝イギリス社会民主主義の悲劇の時期〟こそ、労働組合運動にたいする資本の政策が、もっとも巧妙にあらわれ、著者も指摘されるように、「鞭」と「飴」、「抑圧」と「譲歩」＝「懐柔」の二面性が、もっとも具体的に提示されたからである。本書は、実にこの一歩手前でとどまっているとはいえないだろうか。総じて本書のもつ弱点は、この時期に二度までも（たとえ自由党との連立政権ではあっても）政権の座についた労働党政権の政策的変遷についてはほとんどふれていないことである。そのために、労働党の指導者（右翼的労働組合幹部と密接につながる）のロシア革命以後における政策的転換と独占資本との関係、すなわち両者の癒着もしくは矛盾という側面からの究明もしくは分析が不充分である点が問題であると思う。

以上甚だ簡単な書評を試みたのであるが、学問的なかおり豊かな力作にたいし、的はずれの妄評とならなければ幸である。と同時に「はしがき」でのべられているように、著者が外国労働運動研究の場合にも、たえず日本の現実の運動における緊急な課題に触発されて論理を展開されるという社会科学に志す者にとって大切な実践的な態度を持しておられる点に敬意を表し、今後の御研鑽を期待して筆をおくものである。（法政大学出版局・三六年九月刊・A5・二五八頁・五五〇円）

――一九六二・二・九・深更――

＊　＊　＊

〈追記〉本書は昨年の九月にでているにもかかわらず、筆者の怠慢と編集上の都合のため、書評を依頼された著者の御厚情に副いえず、大変遅くなってしまったことを申しわけなく思っております。紙上をかりてお詫び申し上げます。

S・アアロノヴィチ著『支配階級――イギリス金融資本の研究――』

Sam Aaronovitch, The Ruling Class. A Study of British Finance Capital. London 1961. 192pp.

飯田裕康

以下紹介するのは、わが国においてもすでにその著『独占』によって知られるS・アアロノヴィチの最近の労作である。副題にもみるとおり、本書はイギリス金融資本（とくに一九五〇年代）の分析に重点が置かれてはいるが、その扱う問題領域は「金融資本」そのものに止まっているわけではなく、広くそれに関連した理論問題――階級とか所有とかのいわゆる「現代資本主義」のもとでその規定がまったくことなったと主張される諸範疇に関する問題をも併せ解明しようとしている。本書の構成は次のごとくである。

序　言
第一章、階級・所有及び支配
第二章、金融資本と支配階級
第三章、イギリス金融資本の主要グループ
第四章、階級と社会移動
第五章、支配階級と政治権力
結　語

書　評

著者自身によって限定される問題は、㈠所有の支配からの分離及び社会階層移動に関する理論の検討、㈡銀行業及びそれに類する資本と産業資本との融合、㈢イギリスの主要な金融資本グループの区分、㈣金融資本による国家機構の支配、ということであり、とくに㈢に掲げられる金融資本グループの区分はイギリスにおける研究としては初めてのものであるとしており、また、著者がイギリスの現代資本主義を具体的に分析しようと意図している点からも本書において最も重要な部分――またわれわれがかかる研究を今後のより精緻な独占資本分析のための一つの方法的視角として摂取するうえでの最も重要な部分を構成していると考えられるのである。

＊　＊　＊

先ず問題にされているのは、「階級」である。ここで階級論から問題提起がなされるのは、本書を、一貫した実践的問題意識でつらぬこうとすることに関連している。すでに触れたように、「現代資本主義」にみられる表象的変化というものを本質そのものと見誤る議論への批判ということに係るからである。階級という概念、より平易には、階級という言葉によって示されるある種のアイデアというものが「旧式」なものになったとする考え方がイギリスの支配者層の間に共通し、保守党政府の政治理念となってしまった現実に労働者階級がいかに応えたらいいかということである。アアロノヴィチはまず、マルクスの階級概念が現在において決して誤りでないことを論証する。この場合に核心となる問題は、所有と支配との分離が一般的になる――すなわち、近代的株式会社の成立以来一般化する

ところの株主と実際の経営者（あるいは株式企業の支配者）との関係のうちで現われる事態である。これに関してイギリスにおいてはブルジョアジーから労働党の理論家（例えばA・クロスランド）に到るまで、従来のマルクス主義的階級観の陳腐性を云々している。かかる見解は、所有関係そのものの変化とそれにともなう所得配分の変化との関連にわれわれの注意を集めさせる。そこではたして資本主義的階級構造に変動があるかどうかが問われる。議論をイギリスに限っても、「変動」についての過大評価が不可能であるというのが著者の考えであり、株式会社の出現は株主（貨幣資本家）を経営＝支配層から遊離した階層たらしめるが、重要なのはかかる分離をつうじて支配そのものが集中される傾向が顕著だということである。換言すれば、証券形態における財産所有が高度に集中されているということであり、資本形態の財産所有を通して所得配分が変化せしめられ、バーリの言うような階級の全てに「革命的」変化をもたらすものになっていないのである。株式会社は、一定の支配集団によって独自の政策をもって支配され新たな階級支配を達成しているのである。

ここでは、近代的株式会社の出現以来の支配階級の構造的立脚点が財産所有の変化によるのではなく、支配と所有との分離が生みだす新たな支配構造として把握され、マルクスによって指摘された株式会社の本質が確認されるのである。（第一章）

しかるに、近代資本主義社会の発展はかかる支配構造を基盤として金融資本を形成し、強力な独占的グループを発生せしめる。この過程は、産業と銀行及びそれに類する資本との融合という形態をとって行われ、とくにイギリスではいくつかのタイプの金融組織を中核としつつ遂行された。十九世紀以来の貨幣資本家と産業資本家の分離過程は、それを要因として近代的株式会社を形成せしめた。そして株式会社が独自に「信用」機構としての意義を持つにいたった。独占段階においては、かかる性格が巨大株式企業の他部門への融資の活発化を通して「金融的」性格を一層強化している。しかし著者が中心的に考えているのは、株式企業と同時に成長する独自の諸金融機関の産業企業との関係であって、ここでは株式銀行、保険会社、建設会社、証券取引会社、手形割引業者、マーチャント・バンカー（いわゆる issuing house）等々の産業企業との融合が問題なのである。いわば「支配階級」はかかる融合の結果生成するところの独占的金融資本グループそのものであり、さきの諸金融組織を中心に所有からの支配の分離を徹底させ、支配を集中するのである。われわれはここで著書が従来の金融資本概念を理論的に検討することではなく、そこですでに論じられた成果が一つの抽象であるとすれば、それを具体的になりたたせ、考えうる諸ケースを論究の対象としていることに注目する必要があろう。（第二章）

第三章はそのような意味で本書の最も特徴的な部分であり、第一、二章で行われた理論的検討を前提とした著者によるイギリス金融資本の現状の分析が与えられている。

独占資本主義における資本の運動が必然的にもたらす強大な独占グループの形態・機能は、とくに「金融資本」に関連してはすでにアメリカ合衆国、フランス、ドイツ、日本などの場合について詳細な研究がなされている。しかし、イギリスに関する限り、かかる側面の分析は今日までのところ非常に貧困である。このことはイギリス金融資本にいわゆる金融資本グループが存在しないということではない。イギリス金融資本の若干の姿態とも関連して、(一)イギリス金融資本の頂点に位置するグループには、例にないほどの統一性と原理とがあるということ、換言すれば主要な資本力の全てを単一の政党に組織する能力を有しているということ、すなわち保守党のもとに。かかる統一性は、イギリス資本主義の他国にさきがけての帝国主義的発展ということに関連している。このことは(二)例外的に発展した英資本家と外国地域との連繋という側面を導出せしめる。それは初期的資本輸出、それにともなう金融組織の支配、世界貿易の支配とその結果としての links をもたらしたのであり、さらに原料需要と投資活動を通じての植民地帝国をもたらしたのである。さらに(三)「長期にわたる産業化や世界的な独占的条件によって、また、金融組織の利益が主に海外に向けられることによって、イギリスに強大な産業グループを生ぜしめた。それらは銀行信用以外に自己金融によって成長し、多くの場合金融的機構になった」（七七頁）ということである。

かかる特徴的諸側面を有しながら、イギリスに金融資本グループが存在するにいたる過程は、金融的グループが産業や貿易のなかに移動して強大な産業的商業的な企業が金融的組織になるということである。この中で大きな金融的役割を演ずる組織体としてマーチャント・バンク（あるいは保険会社等）を指摘しうる。そしてこれらを中核として幾つかのグループが形成されてゆく。著者のここでのグループの区分の基準となっているものは、形態の如何を問わず、グループの結果が他の外部の利害とよりもそのグループ内でより密接であると考えられる、ということであり、例えば、ある保険会社がその重役会にある株式銀行から四人の重役を有し、他から一人を有しているとすれば、主要な関連は保険会社とその銀行との間に存在することになる。これらグループは本質的に共通の目標を、利益競争において一致した利害を有しているような結合資本たるものである。イギリスの金融資本グループを分析してみると結合資本がそれ自体としてあいまいな概念ではあれ、具体的な種類分けが可能になる。アアロノヴィチのみるところでは、

(1) Morgan/Morgan-Grenfell　このグループは周知の米財閥と結びつき A. E. I. を金融的に援助し、重役を派遣し、英国電気産業の支配をかくとくしている。

(2) Jardin Matheson/Hongkong & Shanghai Bank Corporation　このグループはイングランド銀行の系列にあり、元来植民地金融を担当するとともに、最近 the City における地位を強化している。

(3) Rothschild/Samuel/Oppenheimer　中心をヨーロッパにおいているが、Royal Dutch Shell の力が重要な地位を占め石油産業を支配している。

(4) Lazards　このマーチャント・バンカーはイングランド銀行

と重役関係を結び証券界を支配し、大小の金融組織を通じて金融・通商・化学業界に強大な力を有している。

(5) Lloyds/National Provincial/R. Fleming　ビッグ・ファイヴの一つである Lloyds の金融上の地位を中心としたグループで、鉄鋼業に資本的に関係を有している。また、Lazards とも関連し、その海外の金融組織を利用してアフリカにおけるイギリス金融勢力の一端を形成している。

(6) Barclays/United Dominions Trust　金融グループとしては最高。Lloyds/National Provincial とも連繋を保ち、保険の分野ではイギリス最大の Phonix と特殊な関係を有している。

(7) Peninsular and Orient Steam Navigation Company/Wm. Cory/Runciman　P&O の海運における独占的地位を中心として、石炭、石油業者が結合している。Lazards の資金的援助が入っている。

(8) Cunards/Furness Withy/Martivs/Royal Insurance　リヴァプールを中心とした一大グループで Cunard の海運業を中心としている。このグループは海外への発展を利益の主要な源泉とするという特徴的なものである。Royal Insurance の国際性がその場合の立脚点となっている。

(9) Midland/Hill, Higginson/Eagle Star/Drayton Midland Bank（バーミンガム）を中心としたもので Rothschild とも結びついている。

(10) Prudential　イギリス最大の保険会社であり海外（とくにアメリカ）に伸長している。Midland Bank と同系列である。

(11) Imperial Chemical Industries (I. C. I.)　I. C. I. は系列企業を多数有し、イギリス最大の産業企業である。Midland と National Provincial とに金融的に結びつき、I. C. I. の重役が Midland の重役会に加わっている。

(12) Bowater/London and Yorkshire Trust　最大の新聞印刷業者で London and Yorkshire Trust を金融的な背景としている。また後者は多くの企業を系列下に置いている。

(13) Courtaulds/British Celanese　レーヨン工業の八一%を支配し、イギリスのナイロン独占を I. C. I. と二分している。また Courtaulds の社長はイングランド銀行の理事会のメンバーである。

(14) Tube Investment　鉄鋼・非鉄金属において強大な力を有している。National Provincial と同系。

(15) Unilevers/Philips　この両者はアメリカをのぞくと世界で二位と六位の企業で、イギリスに限らず、ヨーロッパに強大な勢力を有している。

以上のような諸グループをみることによって、二つの一応の結論をうることができよう。第一に、銀行業やそれに類する資本と産業との結合が驚くべき集中度を発揮するということである。第二には、これらのグループのもつ国際的、帝国主義的性格である。したがって、われわれは金融資本というものを世界的な規模において眺める必要があることを更めて明らかにしうるのである。

ここにおける著者の分析はイギリス独占資本の再生産構造を包括的に明らかにしうるような構造分析としてなされている訳ではないが、いくつかの特徴的なことがらを描きだしている。というのは、第一に、現代イギリス資本主義が明らかにその帝国主義的性格を変えていないこと。第二に、そのことは各グループが他のグループとの関連（多くは金融的）をとおして国外の利害に結びついている。そして第三に、それらグループがすべて金融組織を作出し、一定の形態における産業資本と銀行及び類似資本との融合を必然的に確立し、それがグループ相互の金融的結合をもたらしつつあることである。イギリスではかかる形態で社会的な階級構成が基礎づけられ、少数の金融資本家グループによって支配階級が形成されていることを暴露し、社会学的な諸理論によって主張されるような社会的階層移動が決して階級を解消しその概念を旧式化せしめるものではないことが明らかにされる（第四章）。そのことは単に階級という根本的な問題領域から、現実の生活過程に入りこむ政治過程が少数の支配階級による権力行使によって行われているという事実のうちにも明瞭になるし、その政治権力が窮極的に金融資本の利害に一致せしめられるものである（第五章）。

＊　＊　＊

以上の如き分析をつうじてアアロノヴィチは「金融資本はイギリスの資本家階級の頂点に立っている」（一五八頁）ことを確認し、かれらが「真の支配階級」（一五七頁）であると結論づけるのであるが、さきにも多少ふれたごとく、彼の分析は厳密な理論的な「金融資本」の検討ではなく、マルクス主義の階級理論なり金融資本理論を前提にしつつ、むしろイギリスの現代の独占資本主義（ちなみに著者はその分析対象の多くを一九四五年第二次大戦終了後、とくに一九五〇年代に集中せしめている）のうちでの支配的地位の諸グループを分析することによって前提そのものの正しさを論証しているといってよいであろう。しかるに、そこにはヒルファディング、レーニン以来金融資本概念でたえず問題とされた銀行と産業との関連――融合、癒着――を、銀行を中心とした金融的諸組織にまで拡大した視野においてみることによって、その結合の仕方のいくつかのタイプというものがあることがあきらかにされているのであるが、著者によって第一、二章で指摘されているように株式会社の金融的な機能からして一般的な金融組織（十九世紀以降の資本主義における）の自立化を説いて、金融資本形成の重要な契機とみているように、本書においては少くともイギリス金融資本のもつドイツ、アメリカに比しての――この比較を著者はほとんど行っていないのだが――独自性（一「タイプ」としての性格）を明らかにするという結果になっているのではないかと考えるのである。

――一九六二・三・七――